

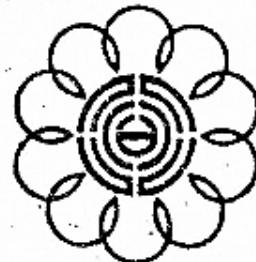
平成 3 年度

## 第 23 回 越谷市民文化祭

### 越谷市郷土研究会展示部門出品紹介

◇周りの 10 個の輪は、昭和 29 年  
11 月 3 日に合併した二町八ヶ村  
(「越谷町」の誕生) をあらわす。  
なお市に昇格したのが昭和 33 年  
11 月 3 日。

ちようそん こし がや まち おおさわまち さくらいむら にいがたむら ましばやしむら おおぶくろむら おぎしまむら で わ むら がもう むら おおさがみ むら  
10 町村とは、越ヶ谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・萩島村・出羽村・蒲生村・大相模村



◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を 4 個集めたもの。  
つまり、コ 4 (越) を意味する。  
◇中心部のデザインは『谷』の文字  
を図案化したものである。

#### 越谷市郷土研究会の案内

- ・昭和 40 年 3 月に発足
- ・年間 3 回の『研究発表会』、年間 8 回の『史跡めぐり』を実施
- ・「古文書クラブ」の学習会、「市民まつり」への参加等の活動を実施

会員を募集中！

# 市民文化祭の展示作品リスト

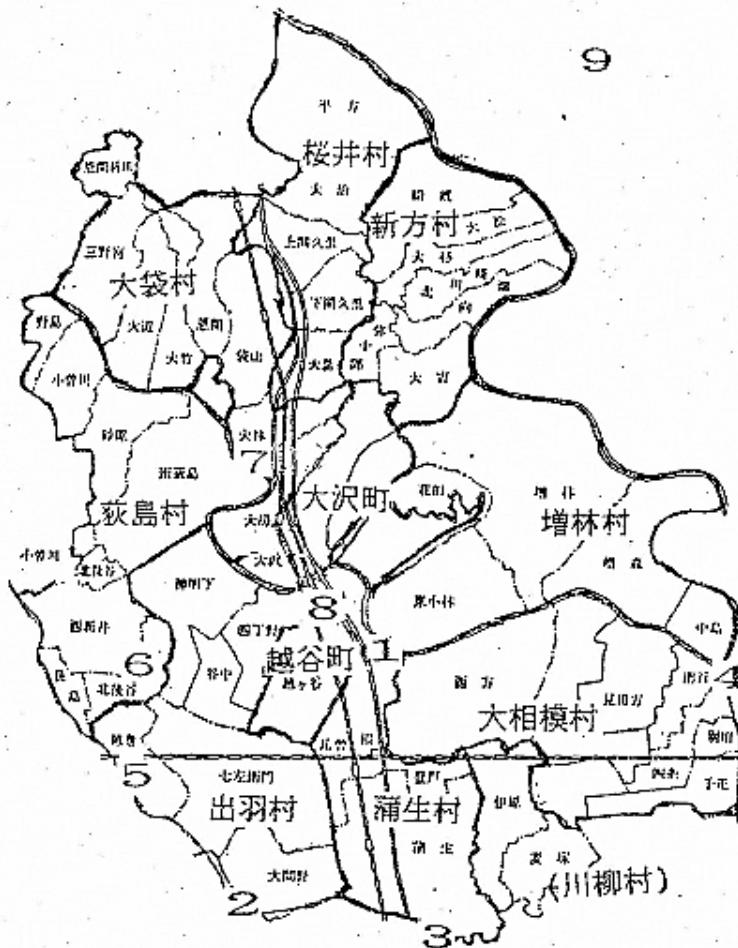
番号	題名	出品者	住所
1	島文斎細田栄之の瓦曾根濱井図	木原徹也	春日部市
2	綾瀬川の船鑑札	野田市	野田市
3	南百(なんど)の水神社	小島誠	新川町
4	國家神道の軌跡	高橋清	新川町
5	妙観照の由来	鈴木秀俊	千間台西
6	明治大正期・東京からの行楽地、越谷桃林	吉田敏子	新川町
7	赤山街道と陸羽街道の道しるべ	山崎善司	新川町
8	相定め申す一季奉公人詣け状の事	袋山	千間台西
9	越谷市郷土研究会の谷岡隆夫(当会幹事長)まで電62-7527		

※右の展示作品や入会に関する問い合わせ先は、

越谷市郷土研究会の谷岡隆夫(当会幹事長)まで電62-7527

市内旧二町八ヶ村(十町村)・旧大字略地図

9



ちょうぶんさいじ

かわらぞねためいす

### 1・鳥文斎栄之について

江戸時代の天明から寛政年間（一七八一～一八〇一）にかけてと思われる作品で、一部彩色を施した水墨画である。鳥文斎栄之が、瓦曾根村の世襲名主である中村家（現、瓦曾根一一五一～九）に遊びに来たときに瓦曾根瀬井の景観にいたく感動して描いたものであろう。瓦曾根村の名主である中村家五代目彦左衛門重篤は、六十二歳で隠居し、寺島村（現、墨田区東向島）に移り住み、「菊のや」と称した会席料理屋を経営したが、その頃に浮世絵師の鳥文斎栄之と知り合ったとも推定されている。隠居したのは寛政元年（一七八九）頃である。するといこの絵は寛政年間の作品となる。栄之は喜多川歌麿・鳥居清長と並ぶ天明・寛政期の三大浮世絵師に数えられている。線の細かい気品のある優美な美人画を得意として、風景画を描いたものとしては珍しいという。

昭和五〇年（一九七五）五月一日に越谷市によって有形文化財に指定される。のちこの絵は瓦曾根の中村家（故、裕彦氏）から寄贈されて、越谷市役所市長室に飾られ、現在は越谷市立図書館に保管されている。

絵そのものの大きさは、横二二七・四cm（上）・二二七・六cm（下）、縦四四・二cmである。

### 1-1・瓦曾根瀬井図の書き方について

#### 向かって右

右端の上には、栄之の落款が見られ『榮之筆』との自筆の署名と印（朱印）が押されている。

落款の向かって左下には、白に着色された帆のみが描かれている（一艘の帆船（上部には帆柱の先端も見られる）が見られる。上流から運ばれて来た船荷を、松土手と呼ばれる中土手の南岸で移し変えて松土手の北岸に陸

づけされた船に積まれ、下流の中川を通り江戸に送られたのである。

右端の中央には、元荒川（葛西用水）を渡す土橋が松土手に架かっているのがわかる。この橋の上に松土手に向かって渡っている人が描かれ、すぐ下流には一艘の小船が浮かぶ。

この橋は、昭和三〇年代まであった欄干のない土橋『平和橋』にあたる。明治二〇年の「瓦曾根村地誌調」によると、『溜井橋』として紹介され、長さ一二間（約二二メートル）、幅九尺（約三メートル）、構造は土造、新設は延享二年（一七四五）三月となっている。

昭和一四年頃に台風で流失し、昭和二八年頃旧『平和橋』が架かる。対岸の東小林村（現、東越谷）の人々にとってはとても便利になるため、その喜びを提灯行列などして祝ったという。なお、今の市役所そばに架かっている『新平和橋』は昭和四十一年に起工したものである。

右端下には、民家の屋根らしきものが見られる。

## 中央

向かって右端から中央にかけて、松や船荷を積み降ろしする河岸場（しば）関係の建物が見られる松土手（松の植えられた中土手）があり、その岸辺には芦が生えている。

中央には、満々と水をたたえているであろう溜井の水面の上を西に飛ぶ白鷺（白に着色）が二羽見られる。また、四ヶ村（しかむら）用水の取水口である四ヶ村用水込（いり）には白鷺（白に着色）が一羽止まっている。

向かって右手前には、瓦曾根村の稻荷社の鳥居（朱に着色）とその本殿の屋根（妻入りの部分が朱に着色）が見られる。最手前の大きな松（緑に着色）は中村家のものであろう。

この松の向かって右横には、中村家の屋根と思われるものが大きく描かれている。

榮之は、鳥居と屋根の向きからすると、この松の手前上空あたりから見る瓦曾根溜井の風景を描いているのである。

中村家の屋根の先端の下の左側に、右方の溜井橋より続く地面の線が描かれ、その線は中村家の松の木の中程を通り、四ヶ村用水の取水口を経て、画面左端まで続いている。

向かって左の中程には、水神（すいじん）社の森や鳥居の一部が描かれている小島が見られ、その右隣に仮メ切りの閑桟が見られる。水神社は、明治期の越谷町の漢詩人山本梅塘（ばいとう）が設定した『越谷八景』の内の「水神の落雁」の水神社を指す。水神様のそばにあった『妙法水神』と刻まれた石碑が現在島根婦久（東越谷二一一〇一三）宅に祭られている。水神社の対岸には、河畔砂丘で一段と小高くなつた所にある東福寺（とくふくじ）の松林（緑に着色）が見られる。『越谷八景』の内の松林にかかる「東福寺の秋月」と言わされた東福寺を指す。

また、松土手から対岸に続く土手道が対岸の小林村の土手道とぶつかつたあたり、つまり水神社の対岸の右の方に一軒家が見られる。これは民家である会田家宅（東越谷二一一一三）であろう。

向かって左手前には、鞍を付けた荷馬（一部分に白に着色されている跡があるので白馬と思われる）とそれを引く頭に手ぬぐいをかけた男が東に向かっている様子が描かれている。

東福寺の松林の向かって右から水平にぼけて描かれているものは、東福寺の一段と高い砂丘より東に続く河畔砂丘上に成立した道の両側に見られる集落の様子で、小林村の民家の屋敷森群であろう。この古道は、現在の東越谷二丁目と三丁目の境の道から東越谷七丁目の中央を横切る道で、現在も古くからの農家の家がこの道なりに点在している。

### 向かって左

向かって左には、溜井に浮かぶ小舟が見られる。この小舟には人影が二つ見られ、向かって右の人は四ツ手綱で魚をとっている様子がわかる。溜井で漁業を営んでいる漁師であろう。

また、それより右斜め上には、水神様の小島と対岸との間から棹をとつ

て小船を西に漕いでいるのが見られる。

左端には、芦の繁る溜井の岸辺が描かれている。その最手前には、屋根が二つ見られる。これは現在も越ヶ谷一丁目七番地にある八幡社関係の建物であろう。この八幡社は越ヶ谷町のはずれにあり、日光街道から土手道に向かう古道（越ヶ谷と瓦曾根との境をなしている）に面した所である。

現在の八幡社のそば、土手道に近いところには、地元の人が『お不動様』と呼んでいるお堂が正面を日光街道から続く古道に向けてぽつんと残っている。

正面には「成田山」と書かれた額が掲げられ、お堂の土手道側の側面の屋根に近いところには不動の絵馬や拝み絵馬が残されており、かつては不動信仰が盛んであった名残がわかる。江戸期にはこの辺に八幡社敷地内に置かれた神宮寺があったのである。このお堂はその名残と思われる。

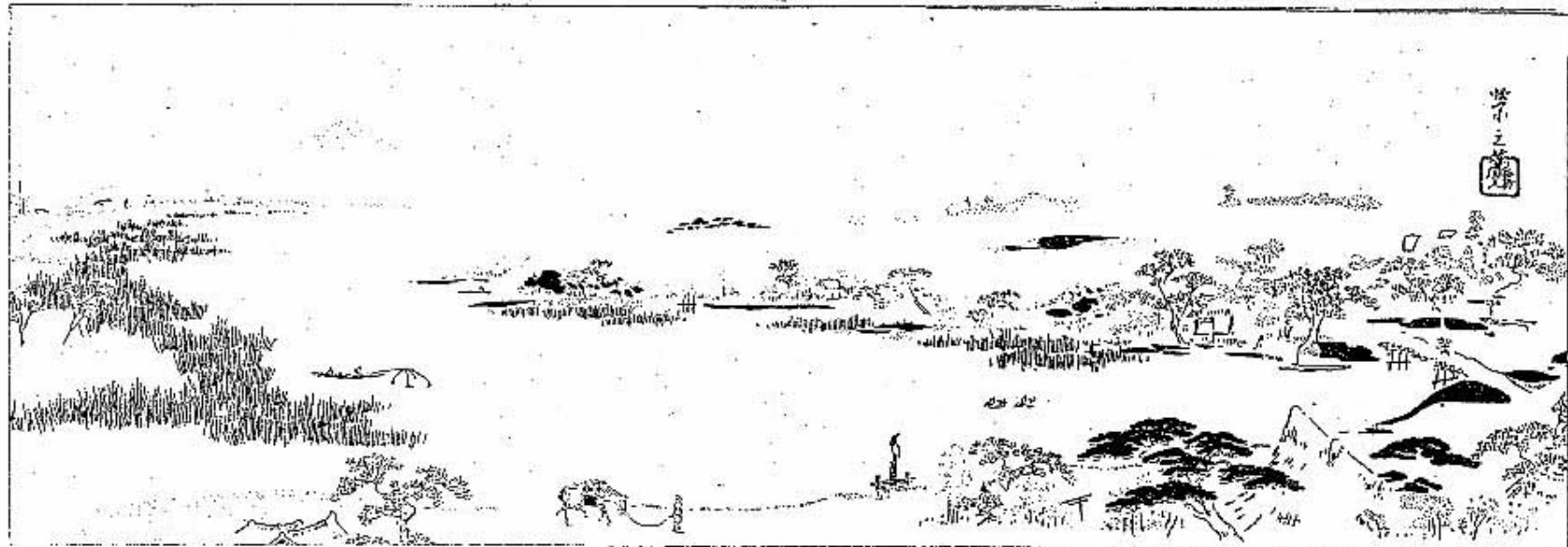
左端より（この辺りに民家の屋根が一つ描かれている）水平に中央方向にぼやけて描かれているものは柳原の岸辺であろう。『越谷八景』の内の柳の繁った河原に降る「柳原の夜雨（よさめ）」と言われた柳原を指す。柳原の上空には、やや北よりの北北西に今も見られる日光の山（男体山）がぼやけて描かれている。

遠景には日光の山その他、筑波の山々がくっきりと見られたはずであるが、この絵では確認できない。筑波の山は越谷ではやや北よりの北東方向に見られ、この図では会田家東側上空に位置すると思われる。

なお中村家から見ると、北の方角は水神社と東福寺との間であり、図のように東から会田家、東福寺、水神社と並ぶ位置関係は矛盾しない。

この柴之が描いた瓦曾根溜井図は構図もよく芸術的にもすぐれ、当時の様子を正確に伝える貴重な資料といえる。

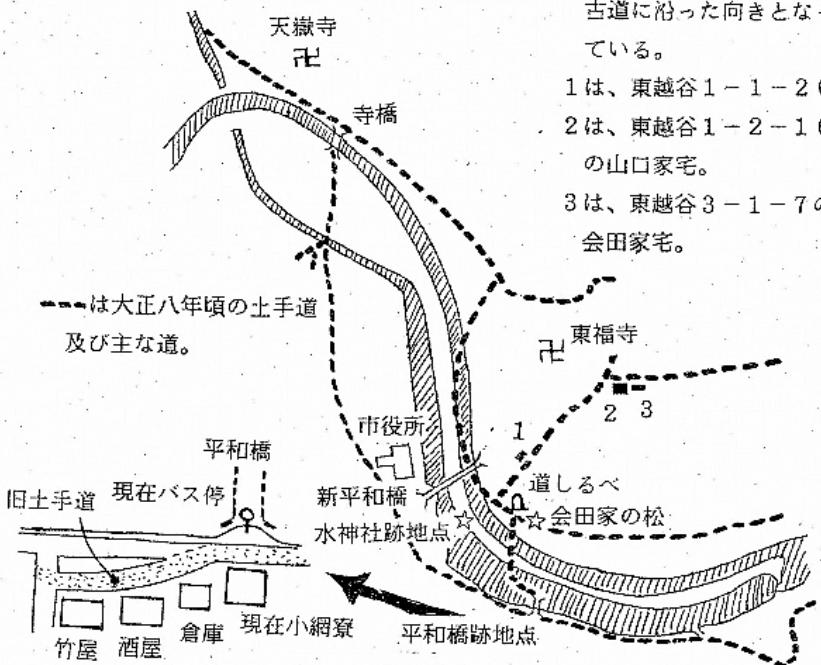
## 鳥文斎栄之の『瓦曾根溜井図』



\*上記の絵は実物をもとにできるだけ正確に  
模写したもの。縮尺は ~~生4~~。

\*『瓦曾根溜井図』の模写絵の作成者  
越谷市郷土研究会理事 加藤幸一

## 現代の瓦曾根溜井



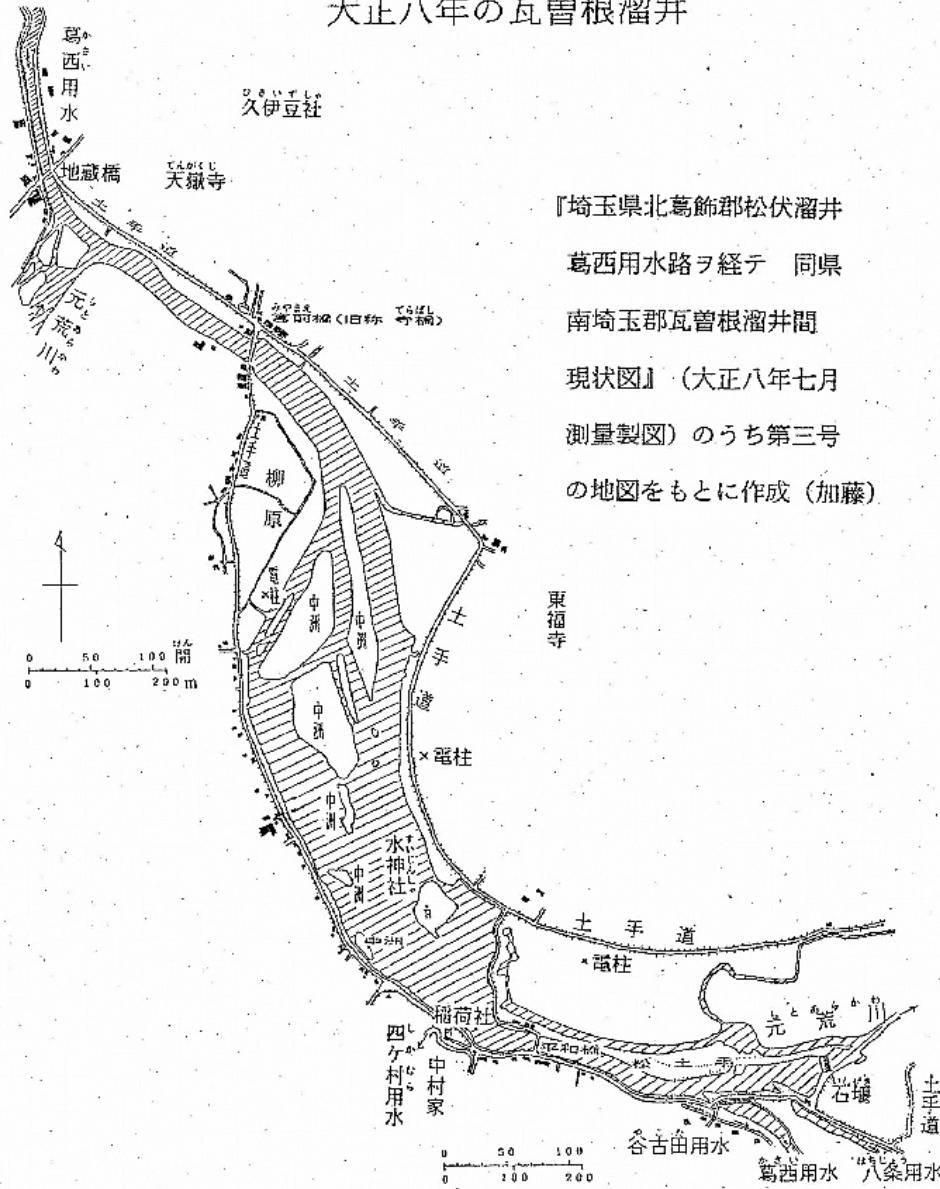
松土手から対岸に続く土手道が、対岸の小林村の土手道とぶつかった所に道しるべがあった。地元にいたたちは、こうしん様（庚申塔か）と呼んでいた。その道しるべには、江戸何里、野田何里と記され、これを建立した小林村の人たちなどの名が刻まれていたと言う。しかし、心ない人によって大破され、残念ながらその原型をとどめず、ただ一部の残された石のみとなって現在の土手上に会田家によってひっそりと祭られている。会田家はこの土手近辺では昔から唯一の民家である。

### 会田家の松

小林村の土手道脇にある会田家の松は、瓦曾根溜井の用排水分離の大工事によって取り扱われる運命にあったが、越谷市行政のはからいで1本のみ今日まで残ることになった。

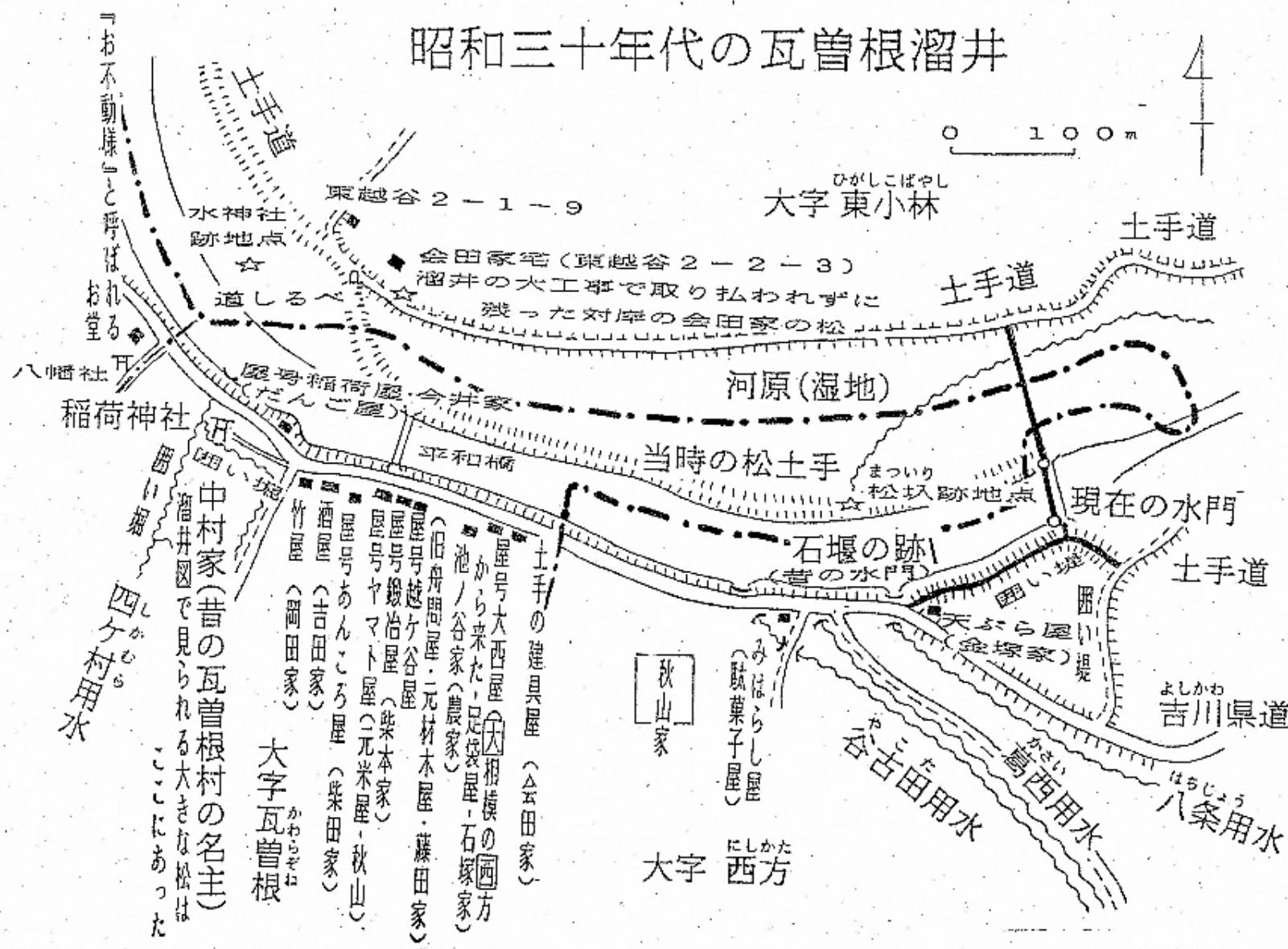
1・2・3は建物が今でも古道に沿った向きとなっている。  
1は、東越谷1-1-20  
2は、東越谷1-2-16  
の山口家宅。  
3は、東越谷3-1-7の会田家宅。

## 大正八年の瓦曾根溜井



# 昭和三十年代の瓦曾根溜井

4



## 2・綾瀬川の船鑑札

木原徵也

武藏国南埼玉郡出羽村大字大間野  
定繫場綾瀬川岸 白船梁

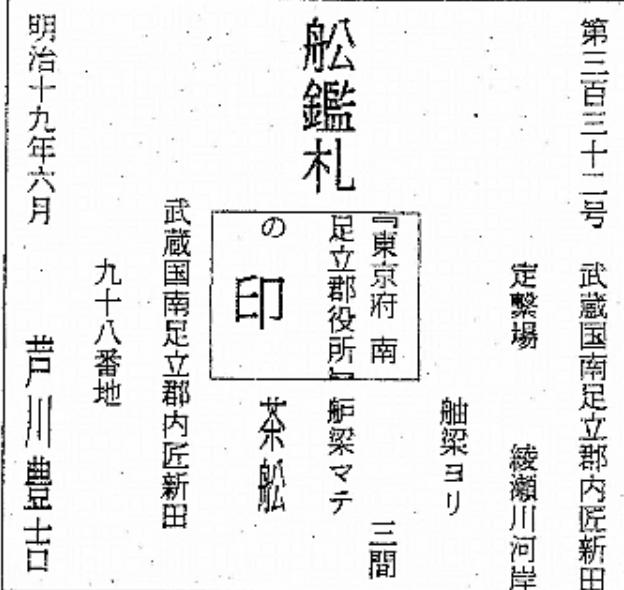
第三九七三號 式間

船鑑札 の印 小団船  
『埼玉縣』 至船梁

武藏国南埼玉郡出羽村大字大間野

五番地

明治廿五年十月八日 関根猪八



この船鑑札一枚は、越谷市大間野町五十目の『よしずや』（関根良男）宅に大切に保存されていたものです。大きさは縦十五・七センチ、幅九センチ、厚さ一・二センチ程の木製の一枚板です。

関根猶八名義の鑑札は明治廿五年十月八日の日付があり、『埼玉県』の焼き印が押され、『小回船』『自舳梁 至艤梁 式間』とあり、他に鑑札番号・川岸の名称・受給者の住所・氏名などが墨書きされており、保存状態は非常に良い。なお関根猶八は現当主良男氏の曾祖父です。

もう一枚の鑑札は、南足立郡内匠（たくみ）新田があるので綾瀬川をずっと下った、現在の東京都足立区南花畠（はなはた）〔旧、内匠本町〕に居住する芦川豊吉に対して『東京府南足立郡役所』（焼き印）が発行したものであり、その時期は明治十九年六月となっている。船の種類は茶船（長さ三間）である。こちらの鑑札は多少傷みもみられ、船に付けたと思われる穴もあり、実際に使用されたとみられる。綾瀬川は江戸時代から明治にかけて水運の盛んな河川であり各所に河岸が作られ、この『よしずや』商店のあった場所も河岸の一つです。

関根良男氏の話によれば、関根家は古くより赤山街道が綾瀬川を渡る場所に居住し、猶八代（江戸末期）より川魚料理屋をはじめ川魚漁のため、何艘かの船を所持していたとのことです。

※明治十九年の船鑑札で、『内匠新田九十八番地』は現在の南花畠三十目三七番地に相当する。かつてはここに『芦川』姓が二軒あり、うち一軒は南花畠三十三七・三にある芦川増五郎（故人）宅、あと一軒は現、南花畠三十一・六に移転した葦川秀夫宅（妻イトの亡父・米蔵）である。

〔※の補説文の文責 加藤幸一〕

### 3・桂川の舟・廿日

小島誠

展示してある二枚の写真は、藤助河岸（とうすけがし）を一寸南に下った同じ場所の綾瀬川です。一つは現在で、一部の松が小さいのは、自動車の排気ガス等公害により枯れたので植え替えたためです。あと一つは昭和初期のものです。岸辺の船は下肥えを運んで特に繫留せんとしているところです。船に乗っている桶に下肥えを汲み入れて、これを天秤棒で担いで渡り板を通って上に上がるのですが、そのスタイルは、松の木の間に見える農夫の姿でおわかりいただけると思います。

この近くに藤助河岸がありますが、当家は高橋と称し、尾張家の家臣の出自とのことです。ここは明治後期から水運の利用が増し、大正二年武陽水陸運輸会社（資本金五万円）を設立、当家の主人が取締役となり舊闘の結果この地の物資の集散地となりました。即ち、「岩槻」の白木綿・蚊帳地・胡麻油、「粕壁」の菜種・胡麻油・米・麦、「越ヶ谷」の米穀類・糸・縄・筵類・味噌等を移出し、また干し鰯（か）・大豆粕・木材・砂糖・塩・セメント・建築用材としての石灰・壁材等を移入し、船の出入りは極めて頻繁でした。その最大の理由は東武鉄道（明治三十二年八月、久喜→北千住間開通）貨物運賃に比し船運賃は三分の一であったことによるのです。

#### 4・南百 (なんど) の水神社 (すいじんしゃ)

鈴木秀俊

川の多い越谷市内では、古くから農業用水や生活用水の確保、水難除け、水害除け、舟運の安全を願つて水神が<sup>信仰</sup>斎興されてきた。

越谷市東町（あずまちょう）二十日は八條領南百村と呼ばれていた。南百のド（ドー）は川の合流点を指すという。南百はこの地名が示すように地形上から特に川や水と深いかかわりがあった。

水神社は元荒川河畔、奥州旧街道に面した、まさに北を流れる元荒川と東を流れる古利根川（中川）が合流する場所に、南百村の鎮守として水神が祀られ、崇敬されてきた。

この地は古くから「南百の渡し」と称され、越ヶ谷宿と一郷半領（にごうはんりょう・吉川町）を結ぶ古利根川（中川）の重要な渡船場として賑わっていた。

ここに明治七年八月、平沼村（吉川町）の徳江忠次郎が自費で木橋を架けた。橋名を「徳江橋」（現、吉川橋）といい、渡橋銭を徴収したので別名「貢取り橋」と呼ばれていた。

明治四十年、村内の無格社手間天神社を合祀した。祭神は、弥都波能売命と少彦名命である。

御子神社  
立久太郎  
御子神社  
立久太郎

境内枯損病木伐採願  
御子縣南埼玉郡出羽村大字越巻

村社稻荷神社

樹種	番號	目通	長寸	尺メ	偏木
松	一号	三丈	二十尺	二十一尺	病木
松	二号	三丈	三十尺	三十七尺	
松	三号	三丈	四十尺	四十七尺	
松	四号	四丈	五十尺	五十七尺	
松	五号	五丈	六十尺	六十七尺	
松	六号	五丈	七十尺	七十七尺	
松	七号	五丈	八十尺	八十七尺	
松	天守	三丈	九十尺	九十七尺	
松	十八尺	一丈	一百尺	一百七尺	

古損木

合計	"	"	松	"	柏
ナニ	ナニ	ナニ	ナニ	ナニ	ナニ
ナニ	ナニ	ナニ	ナニ	ナニ	ナニ

右木通り代株數度候當處令方源ハ過敏ノ農業ニ因り本  
殿ノ破損生レ候件修繕用伐仕用仕度候

大正十五年七月廿七日

右神社主掌

池田悦太郎

右氏子継代

名倉立久太郎

名倉重吉

坂巻久次郎

埼玉縣知事兼縣守圖牒

埼玉縣

出羽村  
役場  
指揮  
印

十五指令社兵收第四五〇號

南埼玉郡出羽村大字越巻

村・社 稲 奇 神 社

本年七月二十七日付願境内枯損病木處  
分ノ件許可ス

大正十五年八月二十一日

埼玉縣知事齊藤守



## 5・国家神道の軌跡

その時代に於ける神社立木伐採の許認可

高橋清

幕末期まで庶民の信仰対象であった神仏混淆は神の直系である天皇に対し不敬であるとのことから明治新政府は神は神、仏は仏と厳然と分離せしめた。明治元年三月出された「神仏分離令」がこれで、その目的は神道の国教化と天皇の神秘化を絶対化するためと言われている。ここで神仏混淆時代は終わりとなつた。

明治三年一月三日神道を国教にする「大教宣布」に関する詔書を発布してその方針を一段と強める。

明治四年神社はすべて國家の宗祀たることを宣言する「太政官布告」が発令され「神社に対し國家の特別保護」が加えられ「近代社格制」が完成した。

官幣社 大社 中社 小社  
国幣社 大社 中社 小社  
諸社 府社 藩社 県社 郷社 村社 無格社

(この社格制度は終戦後占領軍指令によつて廃止される)

この間の神社境内「立木伐採の願い」は町村長を經由して県知事の許認可が必要であった。神社の総轄は県知事（地方長官）にあつたわけである。掲示せる文書は大正十五年のものゝ写しである。

昭和二十年八月十五日終戦により東久邇内閣が成立。

二十年十月五日總辞職。その理由は占領軍の「天皇・皇室制度に対する自由討議制限の撤廃指令」の遂行不可能のためとされている。

昭和二十年十月十一日占領軍は「教育の自由主義化」「神道と國家の分離」指令を発する。

昭和二十一年十一月三日新憲法公布。信教の自由第二十条「信教の自由は何人に対してもこれを保証する。いかなる宗教團体も國から特權を受け、又は政治上の権力を行使してはならない」。所謂「政教分離」で國家神道は終わりとなつた。

完

## 6・妙観照の由来

名倉 さわ

新川一丁目の最北端に妙観照がある。

当社は久伊豆神社の末社であり、久伊豆本神社では、中新田稻荷神社と記されている。土地の人は昔から妙観照と親しんでいる。

その由来は神仏混淆の江戸時代に、当地は低湿地帯の新田であり、水害が多かった。水害から農地を守るために仏の力にすがり、開発者会田政重の法名＝日映観照清信士をこの社につけた（観照院住職談）。当地では巧の意味の妙をつけて妙観照とよぶようになった。

近在では中新田妙観照として親しまれ、多くの人がお参りしている。昔は葦の茂みに隠れ、田園つたいの細い径きを行くと、松の木ごとに祠の瓦屋根がかすかに望めるだけであった。

今は回りも見違えるほどよくなり、今昔の感にたえない。

参詣する人のうつ鈴の音に、頭の下がる思いの妙観照である。

毎年一月二十五日は新川一丁目の稻荷神社で備社譲があり、翌日は中新田稻荷神社（妙観照）で久伊豆神社の神官を招いて、両社の祭礼がおこなわれていた。

今は時代の変化に伴い、二月末の日曜日に両社の話し合いにより、時刻をたがえて祭礼がある。中新田稻荷神社は今も妙観照と懐かしくよばれている。

明治大正期・東京からの行楽地 越谷桃林

越谷市十一間4丁目西2-117-116

宮川 進

越谷の桃林は明治大正の頃、季節には東京からおめでたいの花見客が詰むる行楽地でした。

いまは住宅地（大林、梅が丘園地）となつて、まつたく消えてしまひた面影を、当時の紀行文のいくつかにしのんでみましよう。

大町桂月、田山花袋、河合麟若などの「ほんもの」の紀行文をはじめ、鉄道案内、撮影地案内、遠足の撰にいたるまでも、結構、いろいろなものに、とりあげられています。なお、東武鉄道は明治32（1899）年開通。現在の「北越谷」駅が、そのときの「越谷」停車場でした。

大正9（1920）年、現在の越谷駅の場所に越谷停車場開業。これまでの越谷停車場は「武州大沢」停車場となりました。

現在、地元でも、この桃林（地元では桃山）のことを知るひとはすくなくなりました。そのなかで、おふたりに貴重なお話を伺いました。

○大林、瀬尾商店のおばあちゃんの話

「私の家や、ほかの家の桃畑をあわせて、花が咲く頃には木のまわりにロープをはつて、かうし小高くなつてゐるところを登つて、ひじがわりして下りていらるるようにしていました。店も」「三でございました」

○大沢3丁目、大澤煎餅のおばあちゃんの話

「駅でおりて、桃林見物のために、煎餅の注文をして、かえりにうけとつてかえられました」

※当時の桃林の写真などの資料をおもちの方があられましたら、おみせいただき、ぜひ、ご連絡をお願いいたします。

今回集めた紀行文目録

- 「東武鐵道線路案内記」 小泉一郎著 明治37・4 小泉書房刊  
「東京遊行記」 大町桂月著 明治39・8 大倉書店刊  
大町桂月（1869～1925）評論家 詩人 高知市生まれ 本名芳衛  
評論、新体詩に才能をしめし、赤門（大学）派とよばれた。著書 「我が文章  
」「日本の山水」など。
- 「郊外探勝その日帰り」 落合昌太郎著 明治44・6 有文堂書店刊  
「東武線案内」 戸丸國三郎著 明治44・8 三立社刊  
「越ヶ谷案内」 大塚文男編 大正5・3 子吟書房刊
- 「一日の行楽」 田山花袋著 大正7・2 博文館刊
- 田山花袋（1871～1930）小説家 館林市生まれ 本名鈴跡 客觀的な傍観者的態度の上に立つ「平面描写」を打ち出し、自然主義文学の地位を確立。作品 「田舎教師」「蒲團」「愛」「生」「妻」「縁」など。
- 「遠足の葉」 東京女子高等師範学校附屬高等女学校編 大正8・12 東京女子高等師範学校附属高等学校校友会刊
- 「東京近郊写真の一日」 松川三郎著 大正11・2 アルス刊  
「カメラを携へて 東京近郊へ」 奥川夢郎著 大正11・3 東文堂刊
- 「近郊探勝其日帰りと一夜泊り」 池田政良著 大正11・4 九段書房刊
- 「東京近郊めぐり」 河合醉茗著 大正11・7 博文館刊
- 河合醉茗（1874～1965）詩人 芸術院会員 埼玉市生まれ 本名又平  
明治期の詩壇において「文庫派」の一人にかぞえられ、詩風は平明、穏健、質実で、つねに自然への憧憬をもちつづけた。日本近代詩の先達、指導者。
- 「楽しい一日二日の旅」 高橋寿恵著 大正14 九段書房刊
- 「東武鐵道線路案内」 渡辺政太郎著 大正15・5 鉄道智識普及学会刊  
「東京近郊電車案内」 渡辺政太郎著 大正14・9 大正名所図絵社刊

## 8 赤山街道と陸羽街道の道しるべ

### 赤山街道

山崎善司

赤山街道は、承応三年白光街道が正式に制定、日光奉行が置かれた頃、安行の赤山障屋より、伊奈家が最短距離の道を、四方に向け造つたのを、今も赤山街道と云う。

勿論、日光街道越ヶ谷宿に通する道で、伊奈障屋辰の口より、越ヶ谷宿中町迄が赤山街道と云う、越ヶ谷新石三丁目と中町との境の道でもある。宿は、庚申塔は、日光街道越ヶ谷宿中町側分岐点に建られたものであるが、今は、有龍達雄氏同地内、箕輪桑三郎氏宅に移り建つていて、あるが、今

### 庚申塔

道しるべ

一、碑銘		二、種在地別		三、所	
右裏側	左側	正柱	中台	越谷	庚申塔
面	面	面	台	市	越ケ谷
裏	側	裏	側	越	中町
方	方	方	方	萬	高ササ
方	方	方	方	延	高ササ
方	方	方	方	元	高ササ
此	此	此	此	此	此
此	此	此	此	此	此
此	此	此	此	此	此
庚□	721	庚□	005	庚□	721
大□	□	大□	□	大□	□
とさ□	c c c	申□	c c c	申□	c c c
がが□	m m m	がが□	m m m	がが□	m m m
だやみ塔□	巾巾巾	だやみ塔□	巾巾巾	だやみ塔□	巾巾巾
よ	247	よ	247	よ	247
し川	980	川	980	川	980
かわ	c c o	かわ	c c o	かわ	c c o
う	m m m	う	m m m	う	m m m
しば	三中猿台座	しば	三中猿台座	しば	三中猿台座
な	c c c	な	c c c	な	c c c
り	m m m	り	m m m	り	m m m
ち	奥奥奥	ち	奥奥奥	ち	奥奥奥
な	三郎氏宅	な	三郎氏宅	な	三郎氏宅
り	地内	り	地内	り	地内
た	247	た	247	た	247
中	485	中	485	中	485
台	c c c	台	c c c	台	c c c
座	m m m	座	m m m	座	m m m
町	道道道	町	道道道	町	道道道

庚申塔　II 猿田彦神を祀り（神道）、青面金剛を祀る（道教）。

○猿田彦古神（サルタヒコノカミ）、猿女君（サルメノキミ）とも云い、天之八衝（アメノヤチマタ）八道の辻・分歧点に居て、高天原と下の葦原中國を照らしている岐の神。

○青面金剛（セイメンコンゴウ）、病魔・病鬼を払い除く力を持つ、庚申会の本尊として祀る。寿命を司るとも云う。力

### 猿田彦神

（神道）

「日本書紀」

「天孫、邇邇芸命が葦原中國に降臨した時、天之八衝（八方の道の辻・分歧点）に居て、高天原と下の葦原中國を照らす神」が居た。の事から、「猿田彦の事を、「鼻の長さ七咫（ナナアタ）、背の高さ七尺余（又ウ尻明るく輝けり、眼は八咫鏡の如くにして）、照り輝くこと駿體（ホウ）

ズキ)に似たり」と描かれている。

「週邇芸命の父天神」は、天宇受売命(アメノウズメノミコト)に命じて、「吾が御子(週邇芸命)の天降りする道を遮切るのは誰か」と問われた。すると「吾れは、猿田彦と申す、天津神の御子が天降りされると聞き、御先導申上げ様と、此處迄出迎えに来たのだ」と答えた。其處で、週邇芸命(ニニギノミコト)は、猿田彦命に案内を命じた。「猿田彦命」は、道案内の神、岐の神、子孫は、芸道の神である。

八衝(ヤチマタ)で、猿田彦神に初めて逢つた時、鉏女命(ウズメノミコト)は、胸乳を露わにし、蓑帯(モヒモ)を臍の下に垂れて居たと記して有るので、性的所作を以て、接待したのである。

猿田彦神は、後に鉏女命(ウズメノミコト)と婚姻する事に成るので、此の辺の伏線が、猿田彦を心服させたものと考えられる。尚、祭礼の御輿の先導に、立つ高鼻の赤面を付けた、猿田彦神は、現在でも良く知られている所である。

### 青面金剛と庚申

青面金剛(庚申)を祀てある塔で、庚申塚等に各年代の青面金剛像・青面金剛題目・庚申塔・庚申題目・申待等の塔を見る事が出来る。

因に、江戸時代の庚申年は、元和6年(一六二〇)・延宝8年(一六八〇)・元文5年(一七四〇)・寛政12年(一八〇〇)・萬延元年(一八〇〇)となり、此の年に、青面金剛、又は、庚申塔が建てられているものが多い。

### 青面金剛(セイメンコンゴウ)

顔の色が青い金剛童子、大威力があり、病魔・病鬼を払い除く。六臂・三眼の忿怒相をしていて、世俗民間で行われている「庚申会」の本尊で猿の形相をしている。

### 庚申待

「庚申」の夜、帝釈天・青面金剛を祀る。(神道では猿田彦)当日は、徹夜をする習俗である。

其の夜眠ると、人身に居る、三戸(サンシ)の虫が、「人の眠りに乘じて、其の罪を上帝に告げ口をする」と云われる。

三戸の虫は、人の寿命を司ると云われ、其の罪により人の命を短くする。中國の道教の中の「守」に由来するもので、「禁忌」である。平安時代に、日本に伝わり、江戸時代に盛となる行事で、「庚申」・「庚申会」・「庚申祭」・「庚申待」・「申待供養」とも云う。

## 8・陸羽街道と山の神

陸羽街道の出来た年代は不詳だが、奈良朝時代からのものと思われる。その街道の通りを辿ると、久伊豆神社・観音堂・薬師堂・浅間神社等、古代からの神社仏閣の前を、縫う様に通る古道である。

「徳川家康の初期時代には、「奥州街道」と称したが、所処手を加え街道を整備されたので、古陸羽街道とは、多少道筋が異なる箇所がある。

「陸羽街道」は、屋竹橋より荒川を渡りて、北千住桜木町に至り、元千住神社の前を、今の荒川放水路を斜めに六月町を経て、大原に至る。

大原で左折し、下妻街道と分岐し、北に向い、八条・別府・南百に至りて西に向い、大相模・瓦曾根の久伊豆神社（今稻荷）にて、左折照蓮院・觀音堂にて右折して越ヶ谷宿に至る。

越谷境の道標を左に、左折して東光院薬師堂前を右折して進むと（今野地道）、澄海寺・八幡神社を経て、越谷小学校脇て、赤山街道に交わる。野

此處に「山の神」が祭られており、小学校添いに左折すると、浅間神社脇を通り、稻荷前にて左折、愛宕神社（今四丁野旧会田太郎兵衛屋敷内）前を通り四丁野村（今宮本町）に至る。

此の道が、古道陸羽街道と云われる唯一の証拠が、此の「山の神」石碑

で、赤山街道と交わる辻に、祀られて居る所以である。

其の後、徳川家康の入部後、河川改修に伴い、街道の付け替えが、所処に行われて、名も奥州街道と改められた。

### 大山祇

ムヰ

（オオヤマズミノミコト）

伊弉諾（イザナギ）・伊弉冉（イザナミ）皇神の子と記されている神。

大山祇神は、神々を統合し束ねる神で、此の神は、大山積とも、大山津見・又の名を和田志大神と云われる。

「大山祇神」は、「山と海を司る神」である、赤山街道と陸羽街道との交叉点に、建てられたものと思われる。

### 山の神

辻の神 境の神

大山津見とは、大山に住む、即ち、大山を司る神で「山の神」である。

「山の神」は、大山祇神（オオヤマズミノカミ）を祀る、境の神・道の辻・分岐点の祀神である。此處に掲げる、「山の神」の写真は大変珍らしいもので、越谷市金石資料集にも記載されて居無いものである。

同系の神としては、「塞の神」（サイノカミ）がある、越谷市内には、九例を見る。防塞の神で、疫病・悪霊等を村境にて防ぐ神である。

## 山の神

種別	所在地	高さ	幅	奥行き	地内
碑銘形態	越谷市越ヶ谷	58cm	3の2の1	41cm	森田 衛氏宅

不詳の神  
(辻の神・境の神)

### 寿命の神

大山祇神は、人間の寿命を司と云われる。

又、生者と死者との世界を分ける境を司る神で、生者・人間界と死者・幽冥界との境を支配する神である。

大山祇命の娘姉妹、石長媛と木花開耶媛を天孫邇邇芸尊に奉つたが、尊には、美女の木花開耶媛を妃にして、醜女の石長媛を嫌つて戻した、其の為に、天皇家の寿命が花の如くに短いのだとの話がある。

### 酒造の神

造酒の祖神

木花開耶媛が彦火火出見尊を産み奉つたので、父神の大山祇神は、大変嬉び、猿名田の茂穂で、天甜酒（アマノタムサケ）を作り、天地の神神に捧供したと云う話がある。

### 海の神

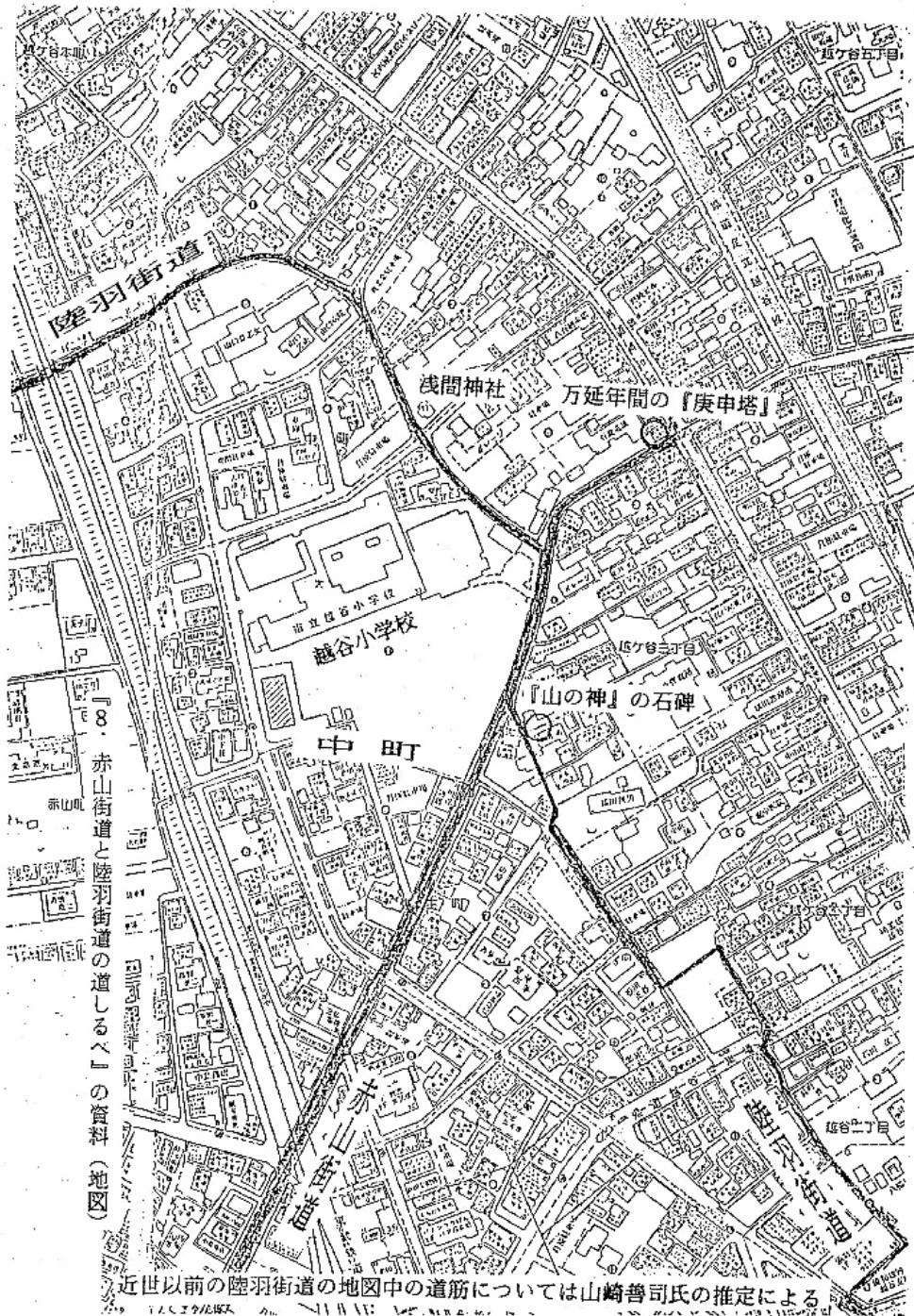
和田津見神 武の神

和田志大神の「和田」は、「綿津見」（ワタツミ）で、海神の「わた」で、海を意味し、海を司る神で「海の神」である。

故に此の神を祀る本源の神は、大山祇神社（大三島神社）の社伝には、海山兼備の神であるとしている。

又、大三島の地は、芸予海峡にあり、山陽・南海・西海の三道航路の要衝である為、大山祇神社への参拝者は多く、武門の守護神として武士にも信奉された、特に、水軍の崇敬は熱烈であった。

全国各地の大山祇神社・大三島神社には、大山祇神・又の名、和田志大神が祀られ、各地の此れ等の神社には、国宝・重要文化財の武具類が多く奉納されている。



## 9・相定め申す「季奉公人請狀の事

吉田敏子

この文書は越谷市郷土研究会古文書クラブの教材として使用したものである。

資料は庄内領中野村（現在、庄和町）の次左衛門の娘せんが、築比地村（現在、松伏町）の忠蔵家へ奉公に出た時の「奉公人身元引き受け状」である。

その内容は「このせんと申す娘は身元確かな者で、私共が保証人となり、今年の十二月から来年の暮れまで、一ヶ年間貴殿方へご奉公に差し出します。お給金は式両表分と決まり、その内から前金として式両、只今確かに受け取りました。よって今度は昼夜共に貴殿の仰せの通りに働くかせます。もしこの者が期間途中で失踪するような事がありましたならば、三日の間に尋ね出し、連れ戻してご迷惑はおかげしません。又お気に入らない場合には替わりの人を差し出すか、頂いた元金をお返しするか、どちらでも貴殿の勝手になさって下さい。奉公中の仕着せは夏單物（ひとえもの）一枚、冬は袷一枚を頂戴し、首尾よく一ヶ年間のご奉公を勤め終わりましたならば、残金の壹分をこの証文をご面倒でもお返し頂きたい。

ご公儀様の捷をお守りする事は勿論の事、お家の仕来たり、何事でも違背は致しません。またこの者の家は代々真言宗觀喜院の檀家で、その寺請状も受けておりますので、ご入用の時には何時でも差し出します。」といった事柄が書かれている。このような時の請書の内容や形式は大体決まっている。

安政八年と言う年は、六月には利根川・荒川が出水し（越巻「こしまき」祭礼帳による）、八月には大風雨洪水があった（武江年表による）。凶作でお年貢に差し詰まり、娘を壹年奉公に出したのであるか。せんは厳しい約束事を書いた請状を入れられ、その上お給金のほとんどは親に前借りされ、着物は夏冬に各一枚ずつと言う有り様で奉公に出た。貧しさからとは言え、せんと言う娘のその後のつらい日々が、この短い文書の中から読み取れるのである。

蘇東坡全集卷之三

一函中文字幾數百而其多余我舊人  
所之之處於月色未明子晝上一奏也墨  
中脫指筆事為繁多已此亦可見其筆氣  
相定其本為豪爽也

其後作詩多不復能追尋何以知遠用相合在  
西蜀居處多如此為何也予謂之近得而  
古觀中之題月之詩人用之者多有矣  
惟是不知其人何以成此而至多全蜀其  
殊無所知其人奉之蜀色尤明勸之而莫之  
棄多用代文進得其事而知之

師 古風標唐法韻之變之者一書承之  
中間何以義遠音節多繩以高有之矣  
代其之宗之中中前輩王氏既已辭退  
其後林楓有之以示吾弟曰此固最善  
為詩蓋予所存其筆氣雄而才思深

書水八分

元祐月 程君

蘇東坡全集卷之三

沈括

## 増林の地蔵尊

小原 勘三郎



古利根川沿いの増林・  
上組地区。

石造の地蔵尊で一八四九（嘉永二）年に地区の念佛講によって建立された。高さ二・四㍍。

市内にある一九四基の地蔵の一つである。大地の恵みを神格化した菩薩が地蔵菩薩である。誕迦入滅から弥勒仏出生までの五六億七〇〇〇万年の間に、衆生濟度をうけもつ菩薩として、奈良時代から信仰されたが、もとはインドの神であったのが仏教にはいったのである。

末法思想のさかんだった平安中期以降、地蔵信仰はとくに広まった。

江戸期には延命・子育・身代り・とげぬき・疱瘡、いば地蔵などの現世利益を与える存在ともなった。また、とくに幼児の救済者とも考えられ、水子供養・賽の河原の地蔵ともなった。赤いよだれかけをする地蔵が多いのはそのためである。

上組のこの場所は、溺死者・疫病死者の火葬場の跡ともいわれている。市内には、かつて女性の講の発達がいちじるしく、娘講・嫁さん講・おかみさん講・念佛講と、女性のみの年令階層による講が多かった。女講中（写真）とあるのは、定かでないが、林泉寺に今も続く女性の念佛講（お姫講ともいう）とつながりがあるのかも知れない。

平成4年10月18日（日） 第18回 越谷市民まつり

越谷市郷土研究会展示發表用資料

# 旧西の方村に點取在する庚申塔めぐり

加藤幸一

## 1. 庚申塔とは何か

人間の体の中に潜んでいる三尸の尸虫が、六十日に一度やつてくる庚申の日の夜に、人の睡眼中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天の神に暴露。するとその報告をもとに判断して生命を奪ったり、若死にさせたりする。それゆえ庚申の日の夜は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないよう寝てはならないという。そこで庚申講の仲間達が一堂に会し、徹夜して過ごす『庚申待』という行事が行われる。その記念として建立された石塔が庚申塔である。江戸時代に全國津々浦々で庶民の間で盛んに行われた。

## 2. 庚申塔の主な形式

寛文年間（一六六一～一六七二）頃から庚申塔の建立が目立ち始めると同時に、青面金剛と呼ばれる仏像を描いた庚申塔がよく見られるようになってくる。そして元禄年間（一六八八～一七〇三）の頃になると、庚申塔建立の大ブームとなり、この頃、『日月・青面金剛・二鶴・三猿』の型式が完成する。つまり、中央に青面金剛像、上部の左右に日月（太陽と月）、下部に三猿が刻まれ、中には青面金剛の両側下に二鶴が刻まれていることもある。庚申様と言うと青面金剛を一般に指すようになるのもこの頃である。

青面金剛は怒りを込めた顔付きで、腕が六本もあって、そのうち四本の手には左右に弓と矢、輪宝（車輪の形をして八方に矛先がでたもの）と矛を持ち、中央の二本の手は合掌したり、右手に劍、左に羅索（一種の綱）を持っている。中には羅索の代わりに女性の髪をつかまえて、その女性をぶら下げているものもある。

江戸時代後半になると青面金剛像を描いた庚申塔の他に『庚申』とか『庚申塔』『青面金剛』という文字のみしか刻まない文字庚申塔も見られるようになる。後にはN. 17のような文字庚申塔を百基並べた百庚申信仰も出てくるのである。なお、N. 8の庚申塔の近くに、題字が『青面金剛上師十哲願定朝之御作』と刻まれた青面金剛のご利益を記した石碑がある。必見に値するので紹介する。

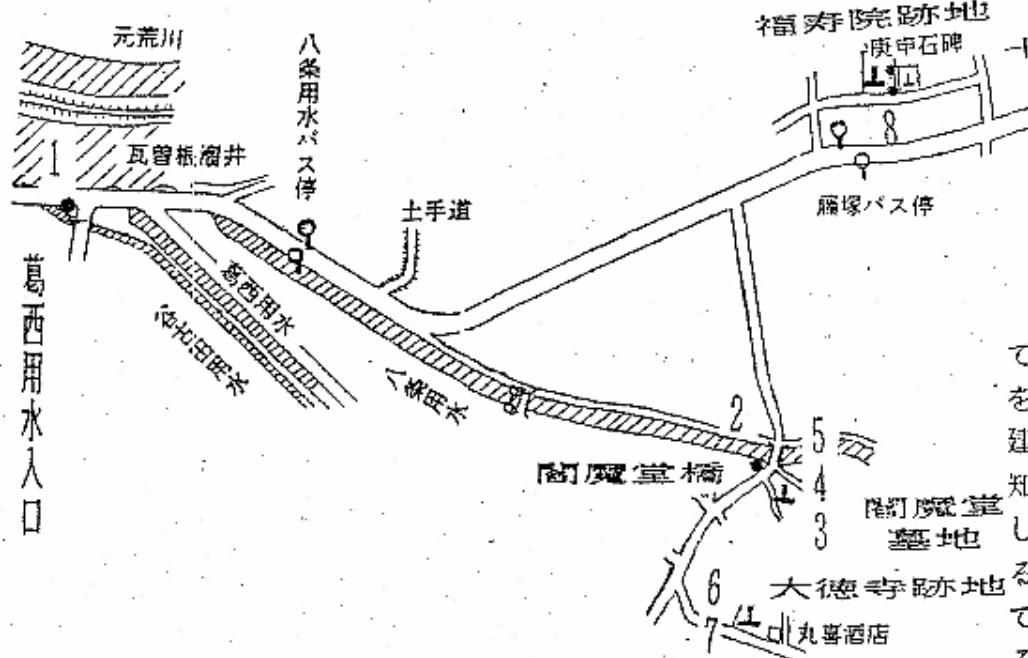
# 旧西方村地区 (一部)

## 旧西方村地区に散在する庚申塔めぐりコース

越谷駅（3番のバス停にて吉川車庫か吉川ネオポリス行きバスに乗車）→ 藤田病院前バス停か一つ先の

八条用水バス停下車→葛西用水坑口→閻魔堂橋→閻魔堂墓地→大徳寺跡地→福寿院跡地→

十一面観音堂→大聖寺（不動尊）→不動前バス停乗車（越谷駅行き）→越谷駅



葛西用水入口

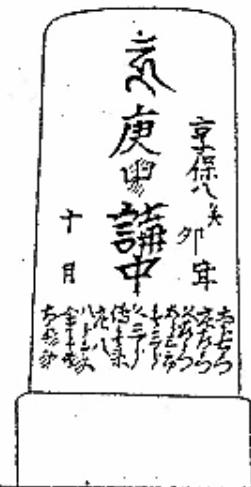


ここにあげた地図には旧西方村地区に限っての庚申塔を要領よく見学するためのコースを示したものである。最後の見学地の大聖寺建物内には展示室があり、大聖寺等の歴史を知る上にはよい機会であるので見学をお薦めしたい。また、西方村地区内の庚申塔に関する詳細を記した資料を置いておくのであわせてご覧願いたい。入室・見学料金は無料である。玄関で呼び鈴を押し、展示室の見学を申し出れば見学ができる。

葛西用水取入口

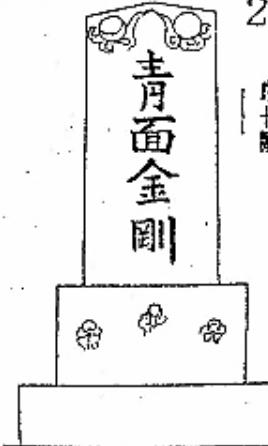
約十畳

文政八年（一七九五）



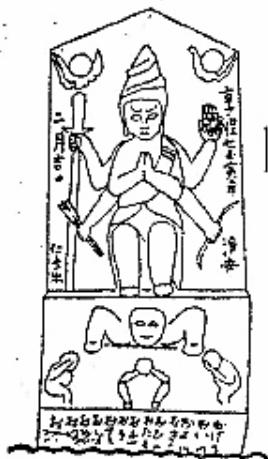
圓覺堂橋

文政七年（一八二四）



圓覺堂墓地

約十畳 幕末七年（一七八〇）



約十畳

明和七年（一七七〇）



5

約十畳

文政九年（一七九六）



10

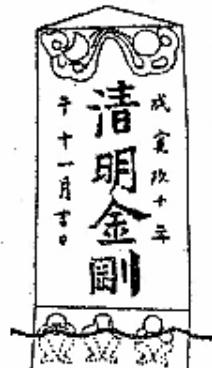
約十畳



9

約十畳

文政十年（一七九八）



十一面觀音堂

文政十年（一七九八）



福壽院

約十畳

文政九年（一七九六）



7

約十畳

文政十一年（一七九九）

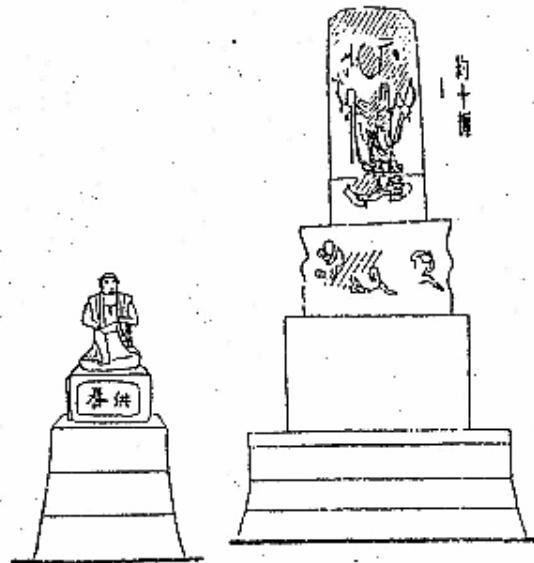
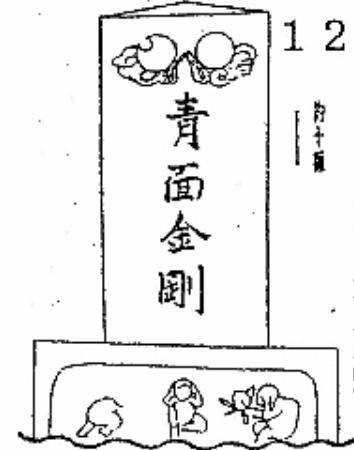
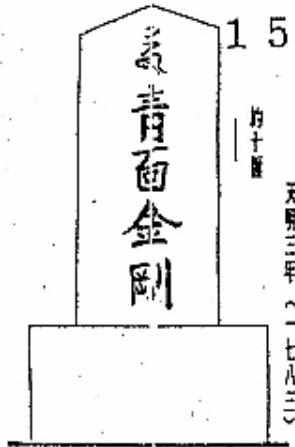


6

約十畳

文政九年（一七九六）





### 図録 1 道しるべを兼ねた文字庚申塔（『庚申詔中』）

向かって右側面には「これより上ちおんじ三里はん」、左側面には「たび人の道しるべともかな しるし石」と「もちはくらせぬのりの かよいち」が刻まれている。また、裏面には「これより左吉川老里大きがみ門」と「これより右市川まで五里」が刻まれている。このような道しるべを兼ねた庚申塔は元禄年間頃から出てくるのである。上部にある梵字のウンは背面金剛を表す。

### 図録 2 文字庚申塔（『背面金剛』）

『庚申塔』とか『背面金剛』と簡単に文字で刻まれた文字庚申塔は江戸後期に多く見られるようになるが、これもその例にもれない。

なお、この庚申塔は慈恩寺・越谷、不動尊、草加・江戸への道しるべも兼ねている。

### 図録 3

造立者がすべて女性だけという庚申塔は全国的に見ると珍しい。図録8と図録11も同じである。

### 図録 6

三猪の見置が持つ巻子に描かれている日の丸の部分に朱色が塗られているのがわかる。この庚申塔を奉納した秋山家は西方村の山野組の世襲名主を勤めた家柄で、その後も明治初期に戸長などを勤めた。

なお、大徳寺は今は墓地が見られるのみであるが、西方村の山野集落の人々にとって心のより所となっていた寺院である。

### 図録 8

この年の二月に江戸で行人坂の迷惑（明和九）大火があった。この塔を建てた女性達も大火のうわさを耳にしていたことであろう。

### 庚申塔併せて存する石碑

天保九年（一八三八）に建立した背面金剛の御利益を記した石碑である。一から始まって十まで紹介されている。必見に値する。この石碑を建立した第山は大聖寺境内の惣門西側にある『良井塚』の碑も建立している。

### 図録 9 文字庚申塔（『清明金剛』）

「背面金剛」と刻むべきを、清く明るいという意味の『清明金剛』としているのは珍しい。風変わりな文字庚申塔といえる。

### 図録 1 4

造立者のうち、「平内」は西方村名主（現、相模町六一ニ五六の須賀家）であり、「東光院」（現、日枝神社東隣一帯の空き地、相模町六一四九一の浜野家）は西方村の鎮守である山王社（現、日枝神社）の別当寺、「智性院」（相模町六一四六三の石垣家の屋号は「知性院」なので、このあたりと推定）は大型寺が支配する寺で門徒と呼ばれた。

### 図録 1 6 初期の庚申塔

この庚申塔は板碑型である。この型は江戸初期によく見られる。中央には庚申塔には付き物の三猪が刻まれている。信仰の仲間組織のことを寛文年間頃までは「結衆」と刻まれていたが、この頃から一方では「講中」と刻まれる石塔も見られ始める。この庚申塔はその例である。

### 図録 1 7 「百庚申」

百庚申は本堂の裏手の民家が立ち並んだ辺りの小河内聚落西隣にあった。ここには小山があって、中央には一丈（約3メートル）余りの庚申塔があり、それより左右に本堂に向かって二段ずつ「庚申」と刻まれた文字庚申塔が百基程並べてあったという。現在は昭和二十年代に既に東門に通じる道の両側に並べてられており、九十七基現存している。一丈余りの庚申塔は天保九年に建立されたものであり、平成三年に本堂裏手より現在地に移された。

石塔中央に刻まれている『庚申』の文字に朱色が塗られていたことが、いくつかの庚申塔に朱色の跡がはっきりと残っていることでわかる。

石塔に刻まれた奉納者の村名を見ていくと、武州大相模不動尊（大聖寺）は、広く周辺の村々の間に厚く信仰を集めていたことや、大相模不動尊の信仰が江戸にまで知られ、本所・柳橋・深川などからも参詣人があったであろうこともわかる。

一方、地林村の辻屋高兵衛という人が奉納している庚申塔もあるが、これから地林村は当時は染め物業や晒し業がさかんであったことが窺付けられる。このように庶民の生活等の歴史をつかむうえで多くの趣を秘めた貴重な資料といえよう。

#### 図録 1-8 「百庚申」

「百庚申供養」との文字が刻まれているこの石塔は、これが造立される三年前に百鬼忌信仰に基づく百庚申の石塔が奉納されていたが、その百庚申を模倣するために造立されたものである。

大分破損されてはいるが、欠けずに残っている輪宝（部分）や鬼の顔がとてもよく描かれ、それに三塗のうち中央の道は男性の性器が、闇か猿は扇子を持って耳をふさぎ読書をしている姿が描かれるなど細部にわたりよく彫られ、優れた石塔であったと思われる。

なお脇にある「庚申塔青面金剛移転宮崎由緒」の石碑を紹介すると、「……明治二十八年本堂大火災にあい、なおまた大正十二年の関東大震災等に遭い、その破損ははなはだしきものなれど今なおその形像を残している。しかるに今元荒川河川改修施工中その区域外とは言え倒壊寸前状態の当本尊を移設宮崎せしものなり。平成三年六月吉日 国家安寧 人心安寧 当山第四拾世 弘進代」となっている。

#### 図録 1-9

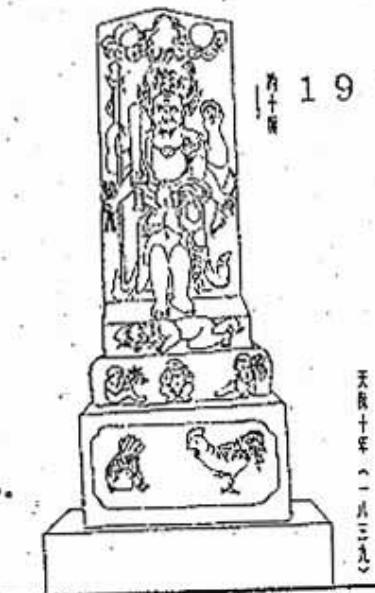
百庚申信仰の「庚申」と刻まれた文字庚申塔（天保六年）や「百庚申供養」と刻まれた百庚申供養塔（天保九年）にのあとに建立された庚申塔である。また、相寿院墓地には青面金剛の御利益を記した石碑『青面金剛上師十誓願定明之御作』（天保九年）も建立されている。この頃が大型寺にとって庚申信仰の盛期といえよう。

図録 1-9については、細部にわたってよく彫られている石塔なので、詳細を述べたいと思う。

この庚申塔は上部には左右に瑞雲に載った太陽と月が配置されている。中央

の六本の腕を持つ青面金剛は頭髪は炎のように立ち、その中にとぐろを巻き頭首をもたげた蛇らしき物が見られ、目は三つ目となり忿怒の形相をなしている。胸には楊柳の首飾り（瓊珞）がある。また、各手には弓と矢や輪宝・三叉の矛・劍を持ち、女性の髪の毛を団まえてぶら下げている。男尊女卑の現れである。ただ、女性の髪が約百五十年間の風雨に晒されて齊腰しているのが残念である。足下には兎が踏み潰されている。この兎は手足の指がそれそれ三本しかないのがおもしろい。その下には三猿がある。山王信仰の影響が如実に現れている。向かって右端は御幣を持つ見猿。御幣は神の代である。この部分が神仏混融となっている。中央の言ひ猿は頭が見られ、その下の陰部も表されていて嘘偽とわかる。陰部に朱を塗り、下の病を治そうとする信仰のあらわれであろう。今と遡って当時の性に対するおおらかさが窺われる。左端は性欲の強い動物とされている桃が女性の臀部を連想させる桃を持つ聞か猿。桃持ち猿は庶民の間では子授け・安産・下の病の祈願の対象となっていた。二猿は普通は青面金剛の両脇の下部に描かれていて、中には何の鳥か判明できない程に簡略に線刻されていたり、あるいは全く刻まれていない物も多く見られる。それがこの庚申塔では三猿の下に独立して、しかも脚部まできちんと描かれている。

以上から私は、この庚申塔は江戸時代の庶民の風俗や信仰をよく反映しているばかりか、芸術的にも優れ、他には見られそうもない庚申塔であると確信している。



# 郷土の昔を旅してみませんか

越谷市郷土研究会のお説明

当会は昭和四〇（一九六〇）年、発足以来、史跡めぐり一九四回、研究発表会一〇六回を重ねてきました。多くの仲間と昔の旅人になつてみませんか。

## 史跡めぐり

緑のかぜの中を、仲間とよもやまを語りあいながら、先人の遺した文化財を訪ねます。夏・冬を除いて年間八回。原則として毎月第四日曜日。日帰りのできる関東一円をめぐります。（東海道品川宿・古河・鎌倉など）越谷駅・南越谷駅で集合・解散です。会員でない方々の参加も大歓迎。広報『こしがや』に予告掲載されます。

## 研究発表会

先学の方や会員の日頃の調査・研究を仲間たちに知らせます。年間三回 第四日曜日の午後。

## 地会報の発刊

平素の成果や思い出話などを集録します。会報『古志賀谷』発刊。

## 越谷文化連盟

市民まつり十月・市民文化祭十一月に毎年参加しています。会員の日常の研究を写真・地図などで展示発表します。

## 古文書クラブ

祖先たちの日記・紀行文・契約書・訴状・生活のようすなどを、皆で読みます。人々の哀歎が、行間からきこえできます。初級theid。毎月第一土曜日・第三土曜日 午後 中央市民会館

その他  
けやき学校歴史散歩教室 南越谷公民館へ講師派遣。老人福祉センター「けやき荘」へ講師派遣。

## 入会のおすすめ

祖先たちの生活のようすを知り、文化財を訪ねながら、仲間の輪を広げましょう。

入会は電話でも葉書でも結構です。なお当会場でも受付けております。（会員へは、すべての行事のご案内をさしあげております）  
申込先 越谷市宮本町三の一七の八  
谷岡 隆夫方 越谷市郷土研究会  
金 費 年間二〇〇〇円 (会報・諸案内状・諸会議費など)  
史跡めぐり その時の費用(交通費・資料代・保険など)  
研究発表会 その時の費用(資料代など)

越谷市郷土研究会 会長 小島 誠

小島 誠